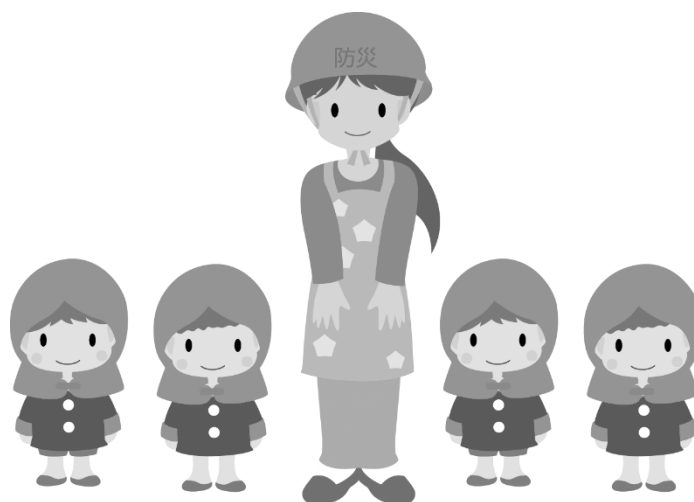


保育研修・講演会「そのとき、いのちを守る保育」

～東日本大震災に学ぶ～

講演内容採録



【とき】平成 28 年 9 月 21 日（水） 19:00-20:30 （18:30 開場）

【ところ】 聞法会館 3 階研修室 1・2 京都市下京区堀川通花屋町上がる

【講演】小幡 幸拓氏（宮城県保育関係団体連絡会 事務局長 東日本大震災復興支援担当）

【主催】特定非営利活動法人 和（なごみ）

【協力】京都市小規模保育協議会・西本願寺

平成 28 年度京都府地域力再生プロジェクト支援事業

地域創生に取り組んでいます！



京都府地域力再生活動

辻（主催者代表）

本日はお忙しい中、保育終了でお疲れのところたくさんご来場いただき、誠にありがとうございます。

台風 16 号の影響で昨日は大荒れの天気となり、本日の開催も心配しておりましたがおかげさまで無事開催できたこと、心よりうれしく思っております。

さて、私たち特定非営利法人和は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災によって京都府へ広域避難を余儀なくされた方々の生活相談等もしておりますが、震災後の当初は津波の被害の大きかった宮城県石巻市での子育て支援ボランティアを行っておりました。このエリアは、3つの保育がその機能を失ってしまった地域で、子どもたちが安心して過ごせる場所がなくなっていました。その後 2012 年 5 月、認可外保育施設を立ち上げましたが、おかげさまで地域の方々への認知や信頼を得ることができ、この 4 月に小規模保育事業所としての再スタートを切ったところです。

私自身、京都生まれ京都市育ちで、お恥ずかしながら大災害への危機感は全くないに等しい状況で生活しておりました。しかしこの大震災が起こったとき、保育者としてたくさんの子供の命を守る仕事をしているのも関わらず、意識の低さをまのあたりにし、復興支援という形で子供の命を守る活動を開始しました。

そして活動を続ける中で、命を守る保育という視点で保育に携わる者の意識をこれまで以上に高めていかないといけないと感じました。

そこで、本日は宮城県より、震災当時の保育の現場に直面し、また保育団体の復興支援担当として活動をされている小幡幸拓氏をお招きしようという運びとなり、ご本人からご快諾いただきました。今日は、経験に基づいた大変貴重なお話をしていただけるものと思い、私自身、とても期待しております。

皆さま、どうぞ最後までお付き合いください。本日はありがとうございます。

（主催者より）

講演に先立ちまして、小幡幸拓氏のプロフィールをご紹介します。

小幡幸拓（おばたゆきひろ）氏は宮城県塩釜市生まれ。京都市、仙台市で保育士として勤務した経験をお持ちです。2011 年の東日本大震災発生後、翌 2012 年 4 月より一年間、宮城県保育関係団体連絡会の東日本大震災復興支援担当専従として活動。全国福祉保育労働組合と立命館大学で行っている共同調査被災地福祉労働者実態調査のメンバーとして調査に関わられました。2013 年 4 月からは保育士と復興支援担当を兼務。著書に「東日本大震災が教える いのちをまもる保育の基準」がございます。現在は宮城県保育関係団体連絡会の事務局長と東日本大震災復興支援担当につかれ、全国福祉保育労働組合 宮城支部書記次長も兼務されております。それでは小幡様よろしくお願ひ申し上げます。

以下小幡氏

震災以降、“いつ何が有るかわからない”と思ひ過ごしています。

講演会等で色々な所へ出向くが、スーツを着ていないのは“出先で何か有った時に自分自身を守らなければならない”と思うからです。

震災の時“見た目などどうでもよい。いい車もいい時計もそんな物は意味がない。お金さえも意味がな

い”と感じました。自分の価値観を根底から覆すような出来事でした。

地震が起きたその時

2才児の担任をしていました。子ども達は2階で昼寝中・職員は1階の事務室に降りていた者もいました。揺れが普通ではないと感じたので、下にいた職員皆2階へ行きました。揺れが強く座り込み、無我夢中で子ども達を近くに集めました。自分のクラスは、園児12人・保育士2人で、〔園児6人／保育士2人〕の計算になりますが、実際一人で近くに寄せられる子どもの人数はせいぜい〔園児4人／保育士1人〕でした。

一番目の揺れは2分程度。何十分・何時間にも感じ、死ぬのではないかと思いました。

死ぬのではないかという方向へ気持ちが向くと、とても子ども達を守ることは出来ないと思い、座った状態のままとにかく子ども達に布団を掛けたりしました。

その間、自分の家族の心配もよぎりましたが、目の前の子ども達を守ることに集中しました。

揺れ直後の2才児保育室の様子。

- ・ピアノが動きました。(転倒防止柵は設置。床とピアノは固定していませんでした。幸いピアノの前には子どもは寝かせていませんでした。)
- ・落下防止対策は行っていたので、落下物による被害はありませんでした。
- ・照明器具は宙ぶりの状態になりました。(石膏ボードにだけ取り付けられており、宙ぶりになりましたが、コードはつながっていた為電球は割れませんでした。)

迎えに来ることが出来ない保護者も何名かいました。また迎えに来て家に戻ったが、家の中が散乱していて生活出来ない為、保育園に泊らせてほしいという家庭もありました。

震災当日

自分は18時に車で帰路につきました。その日初めて外に出たのですが、テレビ・ネット・信号・街灯何も使えず真っ暗でした。ラジオをつけていましたが、全体的な事は伝えられていても欲しい情報が一つも流れませんでした。おそらく、陸前高田で津波があったと流れていたはずですが、不思議な事に全く頭に入ってきませんでした。なぜかという、〔自分の家族がどうなっているか〕しか知りたくなかったからです。4時間位かけて塩釜の自宅にもどりました。幸いにも家族とは会うことができました。

ライフラインが全てストップした時は、アナログが強いと思いました。インターネットも電話も通じず、文明の力など何の役にも立たないと思った記憶があります。反射式ストーブが1台有、調理から暖をとるまで、全てにそれを使い、また水が出ないので皿は汚さないようにラップを敷いて使用しました。

三人の親としてどういう風にあの時期と向き合ったか

私の住んでいる塩釜という町は海がすぐ目の前で、実際に津波も来ている場所です。

報道では全然クローズアップされていませんが実際に死者も80人出ています。

翌日の3・12に幼稚園教諭の友人と避難所を周りましたが、〔道の真ん中に家が有る。車の上に車が有る。ほとんどの地域が浸水して通れない。〕というとんでもない光景でした。

あたりまえだった生活が全て失われた

権利が奪われたのはどうしようもないですが、子ども達が普通に園に行って、それぞれの年齢で経験できる事が出来なくなったのが、被災地の現実です。

福島県の保育士さんからは、子ども達が肥満傾向が強くなっている・運動能力が落ちている、という話も聞いています。福島の事はよく言われていますが、宮城でも【今まで出来ていた事が出来なくなっている現実】が有ります。

一人の親として、3.11のあの時に自分の子どもの近くにいってやりたかったが近くにいれなかったことを悔いていますが、あの時は保育士として目の前の子ども達を守りました。そして、自分の子どもを預けている保育士達を信頼していたのであの保育士達だったら、きっと守ってくれるだろうと思って、過ごしました。

震災云々ではなく、普段の生活の中での保護者との関係性というところで今なかなか繋がりを深くもつということが結構大変な時代になってきており、そこが問題です。

日常の保育で子ども達が健やかに育っていくという事だけでなく、災害時に子どもを守ってくれると思ってもらえるレベルの信頼関係を結んでおくことが重要であり、また親としては信頼関係を持っている保育士さんがいるかどうか物凄く重要だと思います。

復興支援担当の活動から、震災以降の事例

石巻市の或る院内保育所は、アパートの2階で再開しました。元々の園に比べると環境的に決して良くはなかったのですが、その保育士は、“自分達はこれでよい。あの時よりはマシになったのではないか”と言いきかせて、しょうがないという妥協のような気持ちで過ごしていました。仮設・プレハブでの再開が多く、本園舎がなかなか建てられない状況で、色々な葛藤が有ると話されていました。

東松島市大曲地区では、1年半位経った時でも園舎の中はぐしゃぐしゃで置き去りにされているようでした。また野蒜（のびる）地区の野蒜保育所では、入所80世帯中72世帯が流出、家が残っていたのは8世帯で、プレハブ園舎で3園合同保育を行っていました。震災後、急に多動になってしまう・急に暗くなってしまいうという子が多くいました。そのような状況から、所長は全園児・全保護者に対して、〔震災時、どういう風に過ごしたか？どんな状況だったか？どんな被害があったか？〕という聞き取り調査をし、【震災当時生まれていなかった0才児がお腹にいた時にどういう風な逃げ方をしたのか？どんな避難場所に居たのか？】を知ることで、その後に出てくるであろうストレスに対応する】という活動をしていました。

命につけられた格差

あの時どんな運営主体だったかにより、格差が付けられました。例えば、公立か民営か・認可か認可外か、で大きな差が有りました。

仙台市の認可ではないが仙台市が認めている保育室は、指定避難所に行ったそうですが「認可園や小学校の子ども達でいっぱい受け入れられないので（認可外園だから）他を探して」と言われたそうです。

気仙沼市の認可外施設（100名定員の大規模園）では、保育再開の要望を受け、飲食店の倉庫を借りて運営しています。認可園であれば行政が場所を用意したりプレハブの園舎を建てる等しますが、認可外なのでやりたければ自分達でやるしかありませんでした。窓は小さく、ガス・水道は無く電気のみでトイレはポータブル、という環境でした。運営は、最低限の維持の為に、0～5才一律17,000円を徴収していました。給料は無い状態で、保育士は失業保険をもらいながら子どもを預かっていました。行政からは何もなく、私達の団体も

認可外の施設にも金銭的な支援を求めましたが、制度上どうしようもないという事で、県単独の補助とそれに市も少し合わせて未満児1人当たり5千円位しか出ませんでした。〈震災があって被災して子どもを受け入れる。でも勝手にやりなさい〉そういう状況です。

支援物資は、まず地域の公立保育所に届き、周りの保育所に割り振られていきます。支援物資の拠点となる公立保育所は手厚いです。

格差は〔公立と民間〕だけでなく、自治体にも出ました。

多賀城市では、公立・民間の認可園と認可外施設長が集まり多賀城市全体での施設長会議が行われ、自家発電装置と防災無線を保育施設に取り付けてほしいと要望を出しました。多賀城市で議論した結果、自家発電装置は公立だけに取り付けられました。防災無線については、予算の関係で公立と認可園だけになり認可外には取り付けられませんでした。

「子ども達の命の為だから自家発電装置を付けましょう」というのであれば、全ての保育施設になればおかしいのではないかとと思いますが、制度上・予算上の問題で、どんなに被災してようが関係なく、入所した施設により差が付けられてしまいます。

保育所の食料備蓄についても、〔最低3日分置きなさい〕と言われますが、置き場所がなかなか有りません。津波が有る地域で震災以降そこに再建した施設ではそこに置いていても意味が無く、必要なのは避難先に備蓄品が有る事です。私達の団体によるアンケート調査結果では、宮城の20の自治体で避難先にも子ども達用の備蓄品を置いているのは3つの自治体だけです。

自治体の格差としての一つの例として亙理町と山元町の例が有ります。亙理町ではあの手この手を駆使してユニセフとやり取りをし、2012年に立派な仮の園舎を建てましたが、山元町では5年半経ってやっと、被災した二園が合同になって保育所が完成しました。車で行けば10分くらいの隣町なのに、これだけ差が出てしまうのは、考えざるを得ないことだと思います。

各地域によって震災後の対策が違う

各地域被災の仕方が違う為、対策が違います。

女川町の保育所の場合ですと、海に面しており津波が来るかもしれないというので、何も持たずに逃げました。避難所に行ってもおむつも食べ物も無く、普段おもしろくない子はその時に限っておもしろする事もあり、津波で流れてきたビニール袋を使いおむつ代わりにして何とかしのぎました。その経験から、どの年齢のクラスにもおむつだけは置いてあります。

東松島市では、靴が大事だと言っています。小学校の体育館に逃げた子ども達が皆、靴を脱いで下駄箱に置き体育館に上がっていました。その後こそこまで津波がきて靴が全部流され、津波が引いた後色々

な物が散乱している上を裸足で歩かなければならないという事になりました。そのような経験より、東松島市の裸足で保育している保育所では、入口には靴を置いていると聞いています。

石巻市では送迎表、塩釜市では紙とペンが大切だと言っています。送迎表は、被災時誰が帰って誰が残っているのかチェックしないと把握できず、紙を見て確認する事で保育士達も冷静になれたそうです。また、紙とペンは、[〇〇さんは今居ます][〇〇さんは逃げています]等の情報をメモして置いてあるのが役に立ったそうです。

それぞれの被災の仕方によりその町によって、【被災した時に何が大事だったのか?】思うことが一つ一つ違います。

津波に対する意識の違いが生死を分けた

東日本大震災時、保育時間中に死亡者が出た保育所と出さなかった保育所があります。死亡者が出た保育所は、震災時電話が通じなかったので役所に行き対応を聞きました。「退避」と「待機」の聞き間違えにより待機していたところ死亡者が出てしまいました。死亡者を出さなかった保育所は、震災前から地域とすごく連携しています。避難訓練では毎回本当に避難場所まで逃げ、子ども達の足でどのように辿り着けるのか想定出来ており、避難先の小学校には避難してきた園児用の部屋が確保されています。また〈津波は絶対来る〉という意識を持って訓練しています。普段の避難訓練の仕方大きく差が出ています。

このように、【指示待ちではなく〈自分達がどうしなければいけないのか〉を所長は勿論主任・現場の保育士ひとりひとりが普段の保育の中から考えておかないといけない】という事を痛感しました。

震災以降 今 子ども達はどうか

ほとんどの園児が震災以降に生まれている子ども達ばかりですが、やはり影響が有ります。浸水地域では仮設住宅に住んでいる子がまだまだ沢山います。その子達は、親や大人の環境から「この仮設からどうやって抜け出すか」とか「災害公営住宅にまた外れた」等の話を日常的に聞いていて津波や地震に敏感で、保育所の避難訓練でもいまだに凄く怖がってしまうという話を聞きます。また子ども達だけではなく、保育士達も震災の記憶がしみついており、5年半経った今も海辺に近づけない人達が沢山います。

震災から5年経過して 今思う事

講演をする時に思い出し話をするのが、もう少し前はともしんどかったのですが、今ではそうでもないです。ということは、自分の中で徐々に薄れていっていると思うのです。薄れていっている事は良かったなと思うこともあります、それでは語り継いでいけないなという危機感も同時に有ります。今一番怖いことです。

震災はしっかり語り継いでいかないと、その教訓のようなものは他の地域の人には伝わらない、自分だけでなくその当時、震災を受けた保育士は皆そういう立場であらねばならないと思っています。ただ年々その保育士が減っています。震災の大変さを思いながら保育をしていくのが大変であったり、実家が被災して辞める保育士が多いのです。現在自分の保育園で震災時にいた保育士は45人中8人しかいません。若い保育士の入れ替えが激しく、日々の保育もとても大変な中で、どうやって語り継いでいけばよいのだろうとすごく考えます。ころころ保育士が入れ替わるとその土地の特性や危険場所等を語り継いで

いく人がどんどん少なくなっていく。単純に長く勤務しているのが良いというだけではなく、震災をいう視点を入れた時に子ども達の命を守っていくという為にも長く働き続けて地域との連携を大事にしていくという事がすごく大事なんだなと思います。

心に刻まれた言葉

石巻にある保育園の園長先生の言葉で「自分の命を守りなさい・大事にいなさい」というのがあります。これは、「目の前で子ども達が流されそうになっているのに、ただそれを見ているだけで自分の命を守る」というのではなく、そうならない為に、国・行政に対して制度を改善する要求をしていく・究極の選択をしなくてよいように今の段階からもっと改善する要求をしていかなければならない、という意味だと受け取っています。

行政に働きかける重要性

災害時にどんな対応をされるか・自分の地域でどうなるか考えておく必要があります。備蓄品の購入等、行政・国にどんどん要求して行ってよい・要求していかねばならないと思います。

熊本地震の事例として、新制度から外れている認定子ども園などは運営が行き詰まり大変だと聞いています。そういう事を考えると、東日本大震災の時に有った問題はそのまま熊本地震のところへスライドされており、東日本大震災での教訓は何もいかされていないというのが実際のところでは。

この先、新制度に変わり市場化が進み直接契約の所が増えると考えた時、自己責任を押し付けられる事になると思うので、今直接被災地に何かをするという活動は減っていますが、まず各地域の中で各地域を良くしてそれを全国へ広げていくことが、結果的に復興に繋がっていくと思っています。

震災復興の視点を持ちながら、行政とのやりとりをし、今でも充分でないこの制度をもっと良くしていくという事を行って行ってもらえたらと思います。

発行年月：2017年3月

発行：特定非営利活動法人 和

〒600-8833 京都市下京区七条大宮西入西酢屋町10

TEL 075-353-5181

URL <http://www.fucco-nagomi.com/>